Osaka University Knowledge Archive

Title	中国研究集刊　菜号(第67号)　編集後記
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 2021, 67, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83264
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【編集後記】

電子版に完全移行してから二号目となる第六十七号をお届けします。昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の事態で、大学が一時登校禁止になった時期もあり、編集作業には苦慮しました。ただ電子版に移行することはそれ以前に決定していましたので、それがある意味では幸いし、多くの皆様方のご協力のもと、予定通り公開することができました。

前号は移行作業で精一杯だったため、編集・公開について詳しくお伝えすることができませんでした。ここに改めて前号と今号の編集について補足させていただきます。

まず電子版の投稿規定と書式を定めるところから始めました。この作業には、草野友子さんと六車楓さんの協力を得ました。草野さんは、大阪大学中国哲学研究室出身で、助教経験者でもあります。院生時代・助教時代を含めて、『中国研究集刊』紙版の編集に何度もあたった実績がありましたので、その経験を活かして作業を進めていただきました。六車さんは、現役の大学院生で、草野さんをサポートするとともに、学生の立場から有益なアイデアを出していただきました。

こうして投稿規定を整備し、公募を開始したところ、多くの論文が寄せられました。投稿論文の審査については、学術専門委員および委員以外の専門家（いずれも匿名）に査読をお願いし、その意見を尊重して最終的には学術専門委員会で採否を決定しました。要修正となった論考については、約二週間の猶予期間中に修正をお願いしました。

こうして令和二年八月に『中国研究集刊』の専用サイト（https://www.chugoku-kenkyu-shukan.org/）を立ち上げ、無事、電子版第一号となる六十六号を公開しました。あわせて会費制度も取りやめ、誰でも自由に閲覧・ダウンロードできるようにしました。但し、投稿権を持つのは終身会員のみです。終身会員入会ご希望の方は、専用サイトをご覧下さい。

電子版の判型をＡ４サイズとしたのは、通常のプリンタで出力するのに適していると考えたからです。また、専用サイトでは、全体または論考別にダウンロードできるようにしましたが、これまでの紙版にならって表紙画像も掲載したのは、投稿者自身で抜刷を作る際に便利であるという声があったからです。紙版から電子版へ。勇気のいる大きな移行でしたが、今のところ特に問題は生じていません。

本号の編集実務には、さらに菊池孝太朗君にも加わっていただきました。菊池君も中国哲学研究室の現役院生です。前号ですでに投稿規定は確定していたため、作業は比較的順調に進みました。工夫したのは、最新情報の共有です。今年度も一堂に会しての編集作業は困難でしたので、すべての論考を専用ドライブにアップロードし、編集実務担当者が、このドライブ上で常に最新版ファイルを共有しながら作業を進めました。ドライブというのは、外付けハードディスクなどのような物理的記憶装置ではなく、クラウドストレージ、すなわちインターネットを通じて利用できる記憶装置です。インターネット上で共有できますので、紙の原稿やゲラをその都度コピーして配付するより、ずっと便利で確実だったという印象があります。

ただ、今回は、「小特集」を組んだことから、それも合わせると計十三本となりました。この小特集について少し説明しておきます。

令和二年度、多くの教育機関では、対面授業ができなくなり、メディア授業、オンライン授業を取り入れたところが多くありました。授業だけではありません。会議、研究会、講演なども、対面での実施が難しくなったため、オンライン形式が取り入れられるようになりました。しかし、これは明治時代に近代教育制度が始まって以来、誰も経験したことのない事態

で、教育・研究関係者は大いに当惑しました。

ただ、当惑ばかりもしていられません。卒業を控えた学生もいれば、差し迫った研究課題もあります。そこで、これまで『中国研究集刊』の編集などにご協力いただいた方を中心に「オンライン時代の教育研究」というオンライン会議の開催を呼びかけたところ、多くの方にご賛同いただきました。令和二年十二月にオンライン会議を開き、三名の方に、オンラインの実情や課題についてご報告いただきました。

それは、参加者に深い共感を与えるとともに、多くの知見を提供するものでした。ただちに第二回の開催を計画するとともに、それらの発表をレポートとしてまとめたいと考えたのです。いずれ、新型コロナウイルス感染は終息するでしょう。しかし、この二年間で試行錯誤を重ねたオンライン方式は、今後も様々な局面で活用されていくのではないでしょうか。その時、こうしたレポートがあれば一定のガイドになるように感じました。あるいは、令和二年から三年にかけて教育・研究関係者が直面した大事件の貴重な証言になると思います。そうした観点から、今回、六名の方にレポートをお寄せいただきました。

また、今号には、依頼原稿が一本あります。山口県下松市立下松中学校の国語教諭玉濵ひろみ先生は、中学校における古典教育の実践として、『菜根譚』を使ったスピーチ学習という極めて興味深い授業を展開されています。中学校や高校では、古典教育、特に漢文教育は充分になされているのでしょうか。

本誌『中国研究集刊』は、「中国研究」を謳っていますが、次世代を担う若人、すなわち現在中学校や高校で学んでいる生徒さんが中国古典に興味を持ってくれなければ、この分野は先細りしてしまうでしょう。とかく難解だと敬遠されがちな古典教育をどのように展開していくのか、その一つの例をお示しいただきたく、このたび寄稿をお願いしたところ、ご多忙の中、玉稿をお寄せいただきました。論考中に掲げられた生徒さんたちの実際のスピーチ原稿については、玉濵先生が個別に連絡をとって掲載の了解を得られているものです。

（湯浅邦弘）